

小川未明作

赤い蠟燭と人魚

朗読 小田島恭子

第五卷 1. 小川未明「赤い蠟燭と人魚」

小川未明（おがわ みめい）

小川未明の履歴については「月夜と眼鏡」の項参照。



本編は、人間の優しさに幻想を抱いた人魚が、娘を蠟燭屋の老夫婦に託すが、裏切られて娘は身売りされてしまうという物語。1921年（大正10）に朝日新聞に連載され、未明の出世作となった。

概略は、「人魚の子は美しい娘に成長し、白い蠟燭に赤い絵を描くと、たちまち評判となり、蠟燭屋は繁盛し、神社に納めた蠟燭を灯して漁に出ると無事に帰ってこられるということも分かった。その話しを聞きつけた香具師が、老夫婦に娘を売ってくれるように頼み、最初のうち老夫婦は娘を手放そうしなかったが、結局、多額の金を前にして手放してしまう。すると海が荒れ狂い、沢山の船が転覆し、蠟燭屋も廃業してしまう。呪いはそれでも収まらず、神社は人が途絶え、数年後には街全体が減びてしまう」というもの。

「用語解説」

妊娠（みもち）

身持ち、妊娠すること。

香具師（やし）

縁日や祭り等で興行したり物を売ったりする者

鬼門（きもん）

鬼が出入りするといつて忌み嫌う方角

人魚は、南の方の海にばかり棲んでいるわけではありません。北の海にも棲んでいたのです。あります。

北方の海の色は、青うございました。ある時、岩の上に、女の人魚があがつて、あたりの景色を眺めながら休んでいました。

雲間から洩れた月の光がさびしく、波の上を照していました。どちらを見ても限らない、物凄い波がうねうねと動いているのであります。

なんとという淋しい景色だろうと人魚は思いました。自分達は、人間とあまり姿は変わっていない。魚や、また底深い海の中に棲んでいる気の荒い、いろいろな獣物等けものなどとくらべたら、どれ程人間の方に心も姿も似ているか知れない。それなのに、自分達は、やはり魚や、獣物等といっしょに、冷たい、暗い、気の滅入りめいそうな海の中に暮らさなければならぬ。というのはどうしたことだろうと思いました。

「人間の住んでいる町は、美しいということだ。人間は、魚よりもまたけだもの獣物よりも人情があつてやさしいと聞いている。私達は、魚や獣物の中に住んでいるが、もつと人間の方に近いのだから、人間の中に入って暮されないことはないだろう」と、人魚は考えたのであります。

その人魚は女でありました。そして妊娠みもちでありました。私達は、もう長い間、この淋しい、話をするものもない、北の青い海の中で暮らして来たのだから、もはや、明るい、賑にぎやかな国は望まないけれど、これから産れる子供に、こんな悲しい、頼りない思いをせめてもさせたくないものだ。

子供から別れて、独りさびしく海の中に暮らすということは、この上もない悲しいことだけれど、子供が何処どこにいても、仕合せに暮らしてくれたなら、私の喜びは、それにましたことはない。

人間は、この世界の中うちで一番やさしいものだと聞いている。そして可哀うそうな者や頼りない者は決していじめたり、苦しめたりすることはないと聞いている。一旦いったん手附けたなら、決して、それを捨てないとも聞いている。幸い、私達は、みんなよく顔が人間に似ているばかりでなく、胴から上は全部人間そのままなのであるから——魚や獣物の世界でさえ、暮らされるところを見れば——その世界で暮らされないことはない。一度、人間が手に取り上げて育ててくれたら、決して無慈悲に捨てることもあるまいと思われる。

人魚は、そう思ったのであります。

せめて、自分の子供だけは、賑やかな、明るい、美しい町で育てて大きくしたいという情から、女の人魚は、子供を陸おかの上に産み落そうとしたのであります。そうすれば、自分は、もう二たび我子の顔を見ることは出来ないが、子供は人間の仲間入りをして、幸福に生活をするであろうと思つたからであります。

遙か、あなた彼方には、海岸の小高い山にある神社の燈火ともしびがちらちらと波間に見えていました。ある夜、女の人魚は、子供を産み落すために冷たい暗い波の間を泳いで、陸の方に向かって近づいて来ました。

海岸に小さな町がありました。町にはいろいろな店がありましたが、お宮のある山の下に小さな蠟燭ろうそくを商っている店がありました。

その家には年よりの夫婦が住んでいました。お爺さんが蠟燭を造って、お婆さんが店で売っていたのであります。この町の人や、また附近の漁師がお宮へお詣りまいをする時に、この店に立寄って蠟燭を買って山へ上りました。

山の上には、松の木が生えていました。その中にお宮がありました。海の方から吹いて

来る風が、松の梢に当って、昼も夜もごうごうと鳴っています。そして、毎晩のように、そのお宮にあがった蠟燭の火影がちらちらと揺めゆらいでいますのが、遠い海の上から望まれたのであります。

ある夜のことでありました。お婆さんはお爺さんに向って、

「私達がこうして、暮らしているのもみんな神様のお蔭かげだ。このお山にお宮がなかつたら、蠟燭が売れない。私共は有ありがたいと思わなければなりません。そう思ったついでに、お山へ上ってお詣りをして来ます」と、言いました。

「ほんとうに、お前の言うとおりだ。私も毎日、神様を有がたいと心でお礼を申さない日はないが、つい用事にかまけて、たびたびお山へお詣りに行きもしない。いいところへ気が付きなされた。私の分もよくお礼を申して来ておくれ」と、お爺さんは答えました。

お婆さんは、とぼとぼと家を出かけました。月のいい晩で、昼間のように外は明るかつ

たのであります。お宮へおまいりをして、お婆さんは山を降りて来ますと、石段の下に赤ん坊が泣いていました。

「可哀そうに捨児だすてごが、誰がこんな処に捨てたのだろう。それにしても不思議なことは、

おまいりの帰りに私の眼とまに止るといふのは何かの縁だろう。このままに見捨みすてて行つては

神様の罰が当る。きっと神様が私達夫婦に子供のないのを知つて、お授けになつたのだから帰つてお爺さんと相談をして育てましょう」と、お婆さんは言つて、家うちへ抱いて帰り

ました。そして一部始終をお婆さんはお爺さんはなしに話はなしますと、

「それは、まさしく神様のお授け子だから、大事にして育てなければ罰が当る」と、お爺さんも申しました。

二人は、その赤ん坊を育てることにしました。その子は女の児であつたのであります。

そして胴から下の方は、人間の姿でなく、魚の形をしていましたので、お爺さんも、お婆



さんも、話に聞いている人魚にちがいないと思いました。

「これは、人間の子じゃあないが……」「私もそう思います。しかし人間の子でなくても、なんとというやさしい、可愛らしい顔の女の子でありましょう」「いいとも何<sup>な</sup>んでも構わない、神様のお授けなされた子供だから大事にして育てよう。きっと大きくなったら、<sup>りこ</sup>伶俐ない子になるにちがいない」。

その日から、二人は、その女の子を大事に育てました。子供は、大きくなるにつれてくろめがち黒眼勝な美しい、かみのけ頭髪の色がツヤツヤとした、おとなしい伶俐な子となりました。

娘は、大きくなりましたけれど、姿が変わっているので恥かしがって顔を出しませんでした。けれど一目その娘を見た人は、みんなびっくりするような美しい器量でありましたか

ら、中にはどうかしてその娘を見ようと思つて、蠟燭を買いに来た者もありました。

お爺さんや、お婆さんは、「うちの娘は、内気で恥かしがりやだから、人様の前には出ないのです」と、言っていました。

奥の間でお爺さんは、せっせと蠟燭を造っていました。娘は、自分の思い付きで、きつと絵を描いたら、みんなが喜んで蠟燭をかうだろうと思ひましたから、そのことをお爺さんに話ますと、そんならお前の好きな絵をためしに書いて見るがいいと答えました。

娘は、赤い絵具で、白い蠟燭に、魚や、貝や、また海草うみくさのようなものを産れつき誰にも習つたのでないが上手に描きました。お爺さんは、それを見るとびっくりいたしました。

誰でも、その絵を見ると、蠟燭がほしくなるように、その絵には、不思議な力と美しさが籠こもっていたのであります。

「絵を描いた蠟燭をおくれ」と、言つて、朝から、晩まで子供や、大人がこの店頭みせさきへ買

いに来ました。果して、絵を描いた蠟燭は、みんなに受けたのであります。

するとここに不思議な話がありました。この絵を描いた蠟燭を山の上のお宮にあげてそ

の燃えさしを身に付けて、海に出ると、どんな大暴風雨の日でも決して船が顛覆てんぷくしたり

おぼ

溺れて死ぬような災難がないということが、いつからともなくみんなの口々に噂となつ

て上りました。

「海の神様を祭ったお宮様だもの、綺麗な蠟燭をあげれば、神様もお喜びなさるのにきまつている」と、その町の人々は言いました。

蠟燭屋では、絵を描いた蠟燭が売れるのでお爺さんは、一生懸命に朝から晩まで蠟燭を

造りますと、かたわら 傍で娘は、手の痛くなるのも我慢して赤い絵具で絵を描いたのでありま

す。

「こんな人間並でない自分をも、よく育て可愛がって下さったご恩を忘れてはならない」

と、娘はやさしい心に感じて、大きな黒い瞳をうるませたこともあります。

この話は遠くの村まで響きました。遠方の船乗りやまた、漁師は、神様にあがった絵を描いた蠟燭の燃えさしを手に入れたものだといので、わざわざ遠い処をやって来ました。そして、蠟燭を買って、山に登り、お宮に参詣して、蠟燭に火をつけて捧げ、その燃えて短くなるのを待って、またそれを戴いただいて帰りました。だから、夜となく、昼となく、山の上のお宮には、蠟燭の火の絶えたことはありません。殊に、夜は美しく燈火の光が海の上からも望まれたのであります。

「ほんとうに有りがたい神様だ」と、いう評判は世間に立ちました。それで、急にこの山が名高くなりました。

神様の評判はこのように高くなりましたけれど、誰も、蠟燭に一心を籠めて絵を描いている娘のことを思う者はなかったのです。従ってその娘を可哀そうに思った人はなかった

のであります。

娘は、疲れて、折々は月のいい夜に、窓から頭を出して、遠い、北の青い青い海を恋しがって涙ぐんで眺めていることもありました。

ある時、南の方の国から、香具師やしが入って来ました。何か北の国へ行つて、珍しいものを探して、それをば南の方の国へ持つて行つて金を儲けようというのであります。

香具師は、何処から聞き込んで来ましたか、または、いつ娘の姿を見て、ほんとうの間ではない、実に世にも珍らしい人魚であることを見抜きましたか、ある日のことこつそりと年より夫婦の処へやつて来て、娘には分らないように、大金を出すから、その人魚を売つてはくれないかと申したのであります。

年より夫婦は、最初のうちは、この娘は、神様のお授けだから、どうして売ることが出来よう。そんなことをしたら罰が当ると言って承知をしませんでした。香具師は一度、二度断られてもこりずに、またやって来ました。そして年より夫婦に向って、

「昔から人魚は、不吉なものとしてある。今のうちに手許から離さないと、とてもときっと悪いことがある」と、誠しやかに申したのであります。年より夫婦は、ついに香具師の言うことを信じてしまいました。それに大金になりますので、つい金に心を奪われて、娘を香具師に売ることによって約束をきめてしまったのであります。

この話を娘が知った時どんなに驚いたでありません。内気な、やさしい娘は、この家を離れて幾百里も遠い知らない熱い南の国に行くことを怖れました。そして、泣いて、年より夫婦に願ったのであります。

「わたし妾は、どんなにも働きますから、どうぞ知らない南の国へ売られて行くことを許して

下さいまし」。

しかし、もはや、鬼のような心こころもち持もちになつてしまつた年より夫婦は何といつても娘の言うことを聞き入れませんでした。

娘は、室へやの裡うちに閉じこもつて、一心に蠟燭の絵を描かいていました。しかし年より夫婦はそれを見ても、いじらしいとも哀れとも思わなかつたのであります。

月の明るい晩のことです。娘は、独り波の音を聞きながら、身ゆくすえの行末ゆくすえを思うて悲しんでいました。波の音を聞いていると、何となく遠くの方で、自分を呼んでいるものがあるような気がしましたので、窓から、外を覗いて見ました。けれど、ただ青い青い海の上に月の光りが、はてしなく照らしているばかりでありました。

娘は、また、坐つて、蠟燭に絵を描いていました。するとこの時、表の方が騒がしかつたのです。いつかの香具師が、いよいよその夜娘を連れに来たのです。大きな鉄格子のは

まった四角な箱を車に乗せて来ました。その箱の中には、曾かつて虎や、獅子や、豹などを入れたことがあるのです。

このやさしい人魚も、やはり海の中の獣物だというので、虎や、獅子と同じように取扱おうとするのであります。娘は、それとも知らずに、下を向いて絵を描いていました。其処そこへ、お爺さんとお婆さんが入って来て、

「さあ、お前は行くのだ」と、言って連れ出そうとしました。

娘は、手に持っている蠟燭に、せき立てられるので絵を描くことが出来ずに、それをみんな赤く塗ってしまいました。

娘は、赤い蠟燭を自分の悲しい思い出の記念に、一三本残して行ってしまったのです。かたみ



ほんとうに穏かな晩でありました。お爺さんとお婆さんは、戸を閉めて寝てしまいました。真夜中頃であります。とん、とん、と誰か戸を叩く者がありました。

「どなた？」と、お婆さんは言いました。

けれどもそれには答えがなく、つづけて、とん、とん、と戸を叩きました。

お婆さんは起きて来て、戸を細目にあけて外を覗きました。すると、一人の色の白い女が戸口に立っていました。

女は蠟燭を買いに来たのです。お婆さんは、少しでもお金が儲かるなら、決していやなかおつき顔付をしませんでした。

お婆さんは、蠟燭の箱を出して女に見せました。その時、お婆さんはびっくりしました。

女の長い黒い頭髪かみがびつしよりと水に濡れて月の光に輝いていたからであります。女は箱の中から、真赤な蠟燭を取り上げました。そして、じつとそれに見入っていました。や

がて銭を払ってその赤い蠟燭を持って帰って行きました。

お婆さんは、<sup>あかり</sup>燈火のところ、よくその銭をしらべて見ますと、それはお金ではなくて、

<sup>かいがら</sup>

貝殻でありました。お婆さんは、騙されたと思うと怒って、<sup>うち</sup>家から飛び出して見まし

たが、もはや、その女の影は、どちらにも見えなかつたのであります。

その夜のことであります。急に空の模様が変つて、近頃にない大暴風雨となりました。

ちようど香具師が、娘を檻の中に入れて、船に乗せて南の方の国へ行く途中で沖合にあつた頃であります。

「この大暴風雨では、とてもあの船は助かるまい」と、お爺さんと、お婆さんは、ふるふると震えながら話をしていました。

夜が明けると沖は真暗で物凄い景色でありました。その夜、難船をした船は、数えきれない程でありました。

不思議なことに、赤い蠟燭が、山のお宮に点ともった晩は、どんなに天気がよくても 忽たちまち

大あらしになりました。それから、赤い蠟燭は、不吉ということになりました。蠟燭屋の年より夫婦は、神様の罰が当たったのだといって、それぎり蠟燭屋をやめてしまいました。

しかし、何処からともなく、誰が、お宮に上げるものか、毎晩、赤い蠟燭が点りました。

昔は、このお宮にあがった絵の描いた蠟燭の燃えさしを持ってさえいれば、決して海の上では災難かかに罹おぼらなかつたものが、今度は、赤い蠟燭を見ただけでも、その者はきつと災難に罹おぼって、海に溺おぼれて死んだのであります。

忽ち、この噂が世間に伝わると、もはや誰も、山の上のお宮に参詣する者がなくなりました。こうして、昔、あらたかであった神様は、今は、町の鬼門となつてしまいました。

そして、こんなお宮が、この町になければいいのにと怨うらまぬものはなかつたのであります。

船乗りは、沖から、お宮のある山を眺めて怖れました。夜になると、北の海の上は とこしえ 永  
に物凄うございました。はてしもなく、何方 どっち を見まわしても高い波がうねうねとうねつて  
います。そして、岩に砕けては、白い泡が立ち上っています。月が雲間から洩れて波の面  
を照らした時は、まことに気味悪うございました。

真暗な、星も見えない、雨の降る晩に、波の上から、蠟燭の光りが、漂って、だんだん  
高く登って、山の上のお宮をさして、ちらちらと動いて行くのを見た者があります。

幾年も経たずして、その下の町は ほろ 亡びて、 なく 失なってしまうました。